



子守のひとりごと…。

日本赤十字社富山県支部受託富山県立乳児院 全日赤福祉施設対策委員

子守という言葉があります。「手元にある国語辞典を引くと子供のもりをすること。また、その人。」とあります。私は、乳児院で子守をしています。子守というのは、多くの人が経験あることだと思います。

今、まさに子守（子育て）真最中の方もいらっしゃるでしょう。そして、どなたも、子守をしてもらって大きくなりました。この子守という仕事はなかなか骨の折れる仕事であります。なにしろ子供を守らなければならないのですから。病気や災害から命を守り、食事を与え、睡眠をさせて成長を守り、愛情をそそぎ、発達支援をして心を守るのが子守の仕事であります。このように改めて、子守という意味を考えると、すごく責任が重い仕事だなあと身の引き締まる思いです。

子供を取り巻く環境の変化

話は少し変わりますが、周知のように、多くの方が、親や祖父母など血縁者によって子守をしてもらっていますが、家庭では養育が困難な子供もいます。2008年の厚労省の資料では、日本の乳児院で暮らす2歳までの子供の数は、約3,100人です。措置理由は、親が病気になったというのが3割程度で、これは、50年前とほぼ変化ありません。しかし、死亡や離婚、行方不明がその他の主な理由だったのが、現在は虐待が圧倒的に増えています。措置理由の変化からも今後ますます、愛着形成の問題は深刻化し、個々へのこまやかな対応が必要になってきます。子守を仕事としている私たちは、小さな体に大きな問題を抱えている子供たちを守っていくために何ができるのでしょうか。

人員確保とバーンアウトしない職場環境作りを

2年程前になりますが、不適切な対応を防ぐためのマニュアル作成の過程で職員にアンケートをとったことがありました。その中には、自分自身の生活を見直し睡眠を十分にとり、時間にゆとりをもって行動できるようにする。といった回答がありました。私たちがバーンアウトせずベストな状態で働くためには、まったくその通りであると思います。しかし、例えば子供が感染症にかかれば、隔離等のため部屋がいくつにも分かれ、ころぼそい気持ちでいる子供たちに個々の気持ちを汲み取った対応をするのは困難であります。人数が少なくなる夜勤であればなおさらです。残念ながら分身の術は使えません。仕事にまじめな職員であればあるほど、自分の時間を削りがんばりすぎて疲弊していきます。よい保育の質を保つためには、多くのマンパワーが必要になります。

要求し続けること

現在の人員配置を変えていくのは今日、明日でできることではありませんが要求しつづけていくことは大切であります。乳児院の子供がのびのびとそだっていける環境は、しいては、社会全体の子供が育てやすい社会につながっていくと思うからです。そして、すべての子供が子守唄を聞きながら、「今日も楽しかった」と、安心して眠りにつけますように・・・と、願っています。

以上

次号は松本(乳)を紹介する予定です。